

教師の授業観を変容させる総合的な学習の時間の新単元開発

福原 啓介（学校経営コース）

1 背景

本研究は、小学校における総合的な学習の時間の新単元『夢中』を導入し、教師の授業観がどのように変容するかを探ることを目的とする。中央教育審議会（2021）の答申では、現在の教育においては、個別最適な学びと協働的な学びの両立の大切さが述べられている。これまでも個に応じた指導等による授業改善の動きがあったが、子どもが主体的に学びを創り出す授業実践がされているとは言い難い。しかし、奈須（2021）は、総合的な学習の時間において、子供が自ら探究し、学びを深める活動が可能であることを示唆している。本研究では、『夢中』を創り出す計画段階のプロセスを通じて、教師がどのように授業観を変化させ、指導の在り方を見直していくのかを明らかにする。

2 目的

本研究の目的は、総合的な学習の時間の新単元『夢中』の導入を通して、教師の授業観がどのように変容するかを明らかにすることである。特に、『夢中』の実施に向けた校長や担当教員の働きかけに焦点を当て、職員間の意識共有や準備の過程を分析する。また、教師がどのように授業観を変容させ、子供たちの学びを支援する立場へと移行していくのかを探り、従来の授業スタイルから探究的な学びへの適応過程を明らかにする。さらに、『夢中』の導入によって、教師の役割がどのように変わり、それが学校全体の学びの在り方にどのような影響を与えたのかを考察する。

3 方法

本研究では、職員アンケート、職員間の意見交換会（夢中ミーティング）、校長便りの分析、授業の観察と記録を通じてデータを収集した。職員アンケートは8月と12月の2回にわたり実施し、教師の授業観の変容や『夢中』に対する期待・不安を調査した。また、『夢中』の計画・実施に向けた教師間の議論の内容を分析するために、夢中ミーティングの記録をもとに職員の発言や意識の変化を整理した。さらに、校長が発信する校長便りを分析し、教師の授業観の変化を促す要因を特定した。加えて、授業の観察と記録を行い、教師が子供の学びにどのように関わり、指導スタイルをどのように変化させていったのかを検証した。職

員には事前に研究目的を説明し、研究使用する部分については予め同意を得た。

4 結果と考察

(1) 教師への働きかけ

① 校長便り

校長は「校長便り」を通じて、職員に『夢中』の理念を浸透させることに努めた。教師の役割を「火の守」とし、子供たちの学びの炎を絶やさず燃やし続けることを強調した。特に、「ジェネレーター」という概念を提唱し、教師は単なる知識の伝達者ではなく、子供と共に創造する存在であるべきだとした。また、亀田小学校の職員が「ジェネレーター集団」となり、学校全体をワクワクする学びの場へと変革する必要性を説いた。

また、教育現場における教師の役割を「火の守」として強調し、教師は子供の興味や意欲を継続させる支援をするべきだとした。教師が「苦しいけれど楽しい」学びを提供することで、子供の創造性を高めることができるという。

さらに、『夢中』の取組が「令和の寺子屋システム」として位置付けられ、ICTを活用した主体的な学びを推進する意義が述べられた。教師は、子供たちの学びへの情熱を支え、再び燃え上がらせる役割を担うべきであるとされた。5年生の自然体験教室のキャンプファイヤーのエピソードを引き合いに出し、教師が子供の「炎」を守り続けることの重要性を示した。

校長便りの影響により、教師は積極的に『夢中』の授業づくりに取り組むようになった。3・4年生は、朝学習や授業の合間に『夢中』の試作品作りを進め、11月には試作品交流会を実施。プログラミングやアニメーション制作など、多様な表現方法を学ぶ場が設けられ、子供たちの意欲向上や自信につながった。また、5・6年生も自主学習として家庭で作品制作を行い、学級内で紹介し合うことで、学びのモチベーションを高めた。

『夢中』が学校全体に定着する中で、校長便りの意図的な発行が教師の意識を高める一因となった。これにより、教師は日々の授業の中で『夢中』を意識し、創造的な学びを促進する姿勢を維持することができた。

② 職員間の意見交換

『夢中』の実施に向け、職員間で複数回の打ち合わせが行われた。7月1日の「夢中ミーティング」では、夏休み前のオリエンテーションの進め方について話し合われた。子供が表現の幅を広げられるよう、教師が自作したモデルコンテンツ

(プログラミング、アニメーション、スライド作成など)を紹介し、児童に選択肢を提示し、夏休み中に自主学習として取り組むよう指導することが決まった。

12月16日の運営委員会では、『夢中』の全体計画について検討が行われた。単元の目標や授業の時間配分、指導体制、発表会の形式などが協議され、市内小学校への公開や冬季休業中の準備についても話し合われた。

12月23日には、全学級担任が参加し、『夢中』の単元開始に向けた準備を進めた。児童の希望調査を基に10チームを編成し、それぞれの担当教師を決定した。各チームの指導体制を整え、スムーズに活動が進められるようにした。

1月6日の「夢中ミーティング」では、15時間の授業計画を具体化した。各時間の目標や活動内容を詳細に検討し、ワークシートの活用方法を検討した。さらに、特定の時間帯の使用による他の授業への影響を最小限にするための調整を行った。これらの協議を通じて、教師間での情報共有が進み、『夢中』の単元実施に向けた準備が整えられた。

③ 校内研修

アウトプット（表現すること）に特化した校内研修（授業）の実際

・『夢中』との関連が見られた授業例

1月26日（火）特別支援学級A組

生活単元学習「パワーアップ！A組お楽しみ会」

この単元は、子どもたちが「お客様に楽しんでもらうためのお楽しみ会を開催する」というクリエイティブな学びのゴールが設定されていた。公開授業本時では、子どもたちが自分の役割に積極的に取り組み、相手の気持ちを考えながら友達や教師と関わる姿を目指していた。

この授業は、「夢中」との関連が深い内容だった。まず、学年や特性が異なる子どもたちに対して、それぞれに「大きな声ではっきりと、司会をする」「うまくできなくても、途中で投げ出すことなくお楽しみ会に参加する」などといった適切な目標や「タブレット原稿を見ながら司会をする」「イライラしてきたら、教師が選択肢を提示し、選ばせる」などの手立てを設定し、個別最適な学びを実現していた。また、ゲームで使う道具をみんなで

準備したり、片付けたりする活動を通じて、協働的な学びが促進された。子どもたちは、単元の配当時間20時間をかけて、目標に向かって繰り返し挑み続け、学びがスパイラルに進化していった。このように、楽しい活動で飽きることなく進められ、「お楽しみ会」の準備や実施を通して、子どもたちの力がどんどんパワーアップしていった。

授業では、ゴールの姿と前時の振り返り、今日やることを全員で確認した後、教師の介入は最小限にとどめ、子どもたちが主体的に活動を進めることができるように見守っていた。その場で適切な発言や関わりを褒め、瞬時にフィードバックを行うことで、子どもたちの自信を高め、学びを深めていくことを意識していた。

(2) 授業観の変容

本研究では、授業における「三亀（挑む・伝える・高め合う）」の意識の変容、アウトプット重視の授業、協働的な学びの拡充、そして「個別最適な学び」と「協働的な学び」の両立に着目し、教師の授業観の変容を分析した。アンケート結果から、授業の在り方が大きく変化していることが明らかになった。

① 「三亀」を意識した授業づくりの進展

教師が「三亀（挑む・伝える・高め合う）」の理念を授業に取り入れる動きが明確に進展した。『三亀（挑む・伝える・高め合う）を意識して授業を行っていますか』という質問に「あてはまる」と回答した割合が8月の36.8%から12月には61.1%へと増加し、「ややあてはまる」も含めて100%の教師が三亀を意識した授業を行うようになった。例えば、音楽の授業では、子供同士が意見を交換しながらリズムアンサンブルを改善する姿（高め合う）が見られ、外国語の授業では、自ら考えた英文が相手に伝わるか試行する姿（挑む、伝える）が見られた。これらの実践は、教師の意識が、子どもの主体性を引き出す授業へと変化してきていることを示している。

② アウトプットを重視した授業の進化

発信型授業への取組も進んでおり、『授業のゴールにアウトプットを位置付けた発信型の授業づくりをしていますか』という質問に対し、「あてはまる」と回答した割合が8月の21.1%から12月には33.3%に増加した。例えば、6年生社会では、江戸時代から明治時代への変化を新聞記事にまとめる活動が行われ、子供たちは自らの学びを発信する経験を積んだ。一方で、「ややあてはまる」と回答した教師の割合が依然として過半数を占め、すべての授業で発信型の学びが定着しているわけでは

ないことも分かった。教師のスキルや児童の特性に応じた工夫が今後の課題である。

③ 協働的な学びの場の拡充

協働的な学びの実践も徐々に広がりつつある。『個々の学びの交流により新たな学びが生まれる協働的な学びの場を設定していますか』という質問に対して、「あてはまる」と回答した割合はほぼ横ばいだった(31.6%→33.3%)が、「ややあてはまる」の割合が増加(52.6%→61.1%)し、「あまりあてはまらない」が減少(15.8%→5.6%)するなど、協働的な学びへの取組が進んでいることが分かる。例えば、5年生国語では、物語の結末について意見を交換しながら、作者の意図を探る授業が行われた。しかし、一部の教師にとって協働学習を効果的に実践することは依然として課題となっており、指導法や評価基準の整備が必要である。

④ 授業における子供の選択・決定の場の増加

授業における子供の選択・決定の機会が増加していることが分かった。8月から12月にかけて、『授業の中で子供が選択・決定する場を設定していますか』という質問に対し、「あてはまる」と「ややあてはまる」の割合が増加し(89.5%→100%)、「あまりあてはまらない」がゼロになった。教師が子供の主体性を尊重し、課題の設定は教師が行うものの、その解決方法は子供に委ねる形が増えてきている。これにより、子供が自ら学びの方法を選び、試行錯誤しながら学びを深める場面が多くなった。

⑤ 「個別最適な学び」と「協働的な学び」の両立

「個別最適な学び」と「協働的な学び」を両立させることの有効性を認識する教師が増加している。『個別最適な学びと協働的な学びを両立させることは、子供にとってよい効果がありますか』という質問に対して、「ある」と回答した割合が73.7%から88.9%に上昇した。特に、「個別最適な学び」は子供の自主性や課題解決能力を高め、「協働的な学び」は他者との関わりを通じた学びを促進するという意見が多く見られた。しかし、両者のバランスを取ることが難しいという声もあり、効果的な指導法の確立が今後の課題となる。

⑥ 研修を通じた授業観の進化

『4月に今年度の校内研修主題が示された時点を経験して、これまでの自分の授業観・指導観が変わってきていますか』という質問に対して、8月時点と12月時点では「変わった」と感じている教師の割合が増えている。特に「あてはまる」の回

答者は、8月時点で26.3%だったのに対し、12月時点では33.3%に増加している。校内研修の影響により、教師の授業観が変化しつつあることが分かった。特に、「単元のゴール設定」や「子供が主体的に学ぶ環境づくり」に関する意識が高まり、教師は一斉指導にとらわれず、より柔軟な授業設計を行うようになった。一方で、ゴール設定の難しさや特別支援の必要な児童への対応については依然として課題が残っており、今後も研修や情報共有を充実させる必要がある。

⑦ 『夢中』の授業に対する教師の期待と現実的な課題

『夢中の活動に取り組むにあたり、子供の学ぶ姿に対して期待感がありますか』という質問では「ある」「少しはある」を合わせると、8月と12月の両方で全回答者が『夢中』に対して一定の期待感を持っていることが分かる(どちらも100%)。特に「ある」と答えた教師は8月で42.9%、12月で40.0%となっており、期待感が高いことが伺える。期待感のある教師は、子供が自分の興味や関心に基づいて学びを進め、創造的に活動することに大きな期待を寄せている。タブレットを使った学習など、ICTを活用した活動が子供の主体性を引き出し、学びたいという意欲に繋がると感じているようだ。また、子供たちが自分でテーマを決めることで、主体的に学びを深めることができると考えている教師もいることが分かった。

一方で、「少しはある」と答えた教師からは、新しい試みに対する期待感とともに、一定の不安も見受けられる。例えば、「横道にずれる心配」や「夢中の授業は難しい」と感じている教師もあり、この不安は、新しい学習の形式や進め方に対する職員全体での共通理解や慣れが必要であることを示している。

『夢中』に取り組むにあたっての、自分の授業づくりが変わる期待感を数値で見ると、8月時点で「ある」と「少しはある」を合わせた割合は85.8%(42.9%+42.9%)であり、教師たちのほとんどが期待感を持っていることがわかる。12月では「ある」の割合が減少しているものの、「ある」と「少しはある」を合わせた割合は80.0%(26.7%+53.3%)で、全体としては高い期待感が継続している。「期待感がある」「少しはある」と回答した教師の肯定的なコメントからは、「新たな学習」を行うことや、自分が「ジェネレーター」として子ども視線で考えられることへの希望、そして子どもたちが「学ぶことに対する見方が変わる」といった点で、ポジティブな見通しが立っていることが示されてい

る。「あまりない」と回答した教師のコメントからは、課題として「タブレットの使い方」や「授業ルール」など、実際に授業を行う上での問題を懸念する声が見受けられた。

⑧ 『夢中』の授業づくりに求められる視点と準備

『夢中』の授業を実施するにあたり、教師が自身の授業づくりに対して抱いている心配や不安について問うた。8月と12月のデータを比較すると、不安感が増加していることが読み取れる。8月では「ある」「少しはある」の合計が57.1%であったのに対し、12月には73.3%に上昇している。『夢中』の単元開始間近になり、授業の中での具体的な教師と子供の姿をイメージできるようになってきたからこそ不安だと捉える。教師の不安感はいくつかの要素に集約される。

A) 子供に寄り添う難しさ

「想定外の事態が起きる可能性」「全ての子供に寄り添えるのか」といった不安が挙げられている。個別最適化された支援と協働的な学びをどう両立させるかという点で、教師が不安を感じていることがわかる。

B) 授業の構成と教師の役割

「1時間の授業をどのように構成するのか」「教師はどのような立ち位置で関わるべきか」といった具体的な授業設計への悩みが目立つ。特に、従来の授業スタイルと異なる『夢中』の授業では、教師自身も新しい指導方法を模索する必要があるため、不安が増している。

C) 夢中と他教科との関連性

「各教科や領域の学び方と夢中の学び方が異なるものとして認識されないようにする」という意見が挙げられている。『夢中』の活動を既存の教科指導とどのように統合するかが課題として表れている。「自分が学ばなければならないことが多い」といった声も見られ、教師自身の成長が必要とされている現状が明らかになっている。

「夢中」は、子どもたちの主体的で創造的な学びを引き出す可能性を秘めているが、教員側にとっては多くの期待と不安が混在している。初期の期待感は徐々に現実的な課題意識に変わりつつありことが分かった。

5 総合考察

本研究を通じて、教師が従来の一斉授業から、個別最適な学びと協働的な学びを往還する授業へと移行するプロセスが示された。授業観の変化に、『夢中』が果たした役割は大きい。『夢中』を実践するにあたり、子供が学びの主体になる授業づく

りが求められた。教師は、日々の授業実践の中で、子供が主体となる授業を模索し取り組んだ。校内研修により「単元のゴール設定」と「子どもたちが主体的に学ぶ環境作り」に関する意識が向上した。教師は、単元の最初からゴールを意識し、それに向かって子どもたちが挑戦できるような課題や活動を用意するようになったと感じている。また、「クリエイティブな学びのゴール」を設定することによって、子どもたちが自ら学びを深める姿勢が生まれることを実感している教師も多い。さらに、教師が意識するようになったこととして、「学びのゴールを意識して授業を組み立てる」「学びのプロセスにおけるアウトプットを重視する」「一斉指導にとらわれず、子どもたちの個別の学びを大切にする」などが挙げられ、教師の指導方法がより柔軟で創造的になったことがうかがえる。一方で、支援が必要な児童への対応や、タブレットの適切な活用、教師の介入の度合いについての課題も浮かび上がった。今後の課題としては、①個別最適な学びと協働的な学びのバランスの模索、②活動の二極化への対応、③教師の役割の明確化と教師間の情報共有の強化などが挙げられる。

『夢中』は、単なる総合的な学習の単元ではなく、教師の授業観を変え、学校全体の学びのあり方を変革する可能性を秘めている。今後も教師が共に成長できる学びの場を探究していくことが求められる。

引用文献

中央教育審議会（2021）『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）。

https://www.mext.go.jp/content/20210126-mxt_syoto02-000012321_2-4.pdf,

（2024年8月1日取得）

奈須正裕（2021）. 個別最適な学びと協働的な学び. 東洋館出版社, pp. 62-77.